

「希代は、淵に飛び込んで……自害しました……。」  
そんな……そんな……まさか……

安珍は、地面が……ぐらりと崩れるような気がする。

嘘だ……。そんな事は嘘だ！

「安珍……おまえは、なぜ帰って来なかったのだ？」

口調が、変わった……抑えてきた怒りをぶつけるように……清次は、言葉を吐いた……。

「希代は、おまえを待っていたのだぞ……。」

希代は、そんな事を言わなかったけれど……俺には、よく気持ちがわかっていた……。希代は、毎日、毎日の者達に奉仕しながら……行く人ごとに、お前の事を聞き回っていた……。

数日前も、安珍が、大斎原で大活躍したのを、癩病の巡礼者から聞いたと希代は、それは嬉しそうに話していたものだ。

俺は、……そんな者と親しく話をするもんじゃあない……と注意しようとしたが……あんまり、希代が、嬉しそうなので、言えなかつたんだ……。」

安珍は、大斎原で出会った男の顔を思い出している……その男と楽しそうに談笑する清姫の顔が……脳裏に浮かんだ……。

固い板間の床が融けて……ずぶずぶと……沈み込んでいくような感覚を、安珍は覚えている……。

「それを……なぜ、お前は帰って来なかった！なぜ、わざわざ、真砂を避けて通った……！……妹を、なぜ、絶望に追い込んだんだ……！」

俺は……罪を恐れて……とりかえしのつかない……どうしようもない……罪をおかした……。

「安珍！……俺は……きさまが憎い！」

清次は……吠えた。